

イスラーム聖典のパロール性と井筒俊彦

イスラームの伝統において、聖典クルアーンは、イスラーム教徒にとって「書かれた聖典」であると同時に「語られる聖典」でもある。今回は、わが国におけるイスラーム研究および東洋思想研究の碩学である井筒俊彦（1914～1993）が、アラビア語やイスラーム思想を学び始めた青年時代のエピソードに触れながら、イスラームにおける聖典のパロール性（口述性）、すなわち「語られる聖典」の側面について考えてみたい。

井筒俊彦と二人のタタール人との出会い

井筒俊彦は晩年、作家の司馬遼太郎との対談「二十世紀末の闇と光」（『中央公論』1993年1月）の中で、聖典論の視点から見ると、実に興味深い話をしている⁽¹⁾。彼がクルアーンをアラビア語原典から初めて邦訳したことは広く知られているが、井筒がアラビア語を学んだのは、二人のロシア生まれのタタール（韃靼）人からであった。

慶應義塾大学を卒業して、大学の助手になったばかりの井筒は、アブド・ラシード・イブラヒームという高齢の人物に出会った。昭和12年（1937）のことであった。アラビア語とイスラームを2年ほど学んだが、イブラヒームはジャーナリストであると同時にイスラームの公けの礼拝を司るイマーム（指導者）でもあった。その後、イブラヒームからの紹介で、ムーサー・ジャーッラーという60歳過ぎのタタール世界で随一の学者に出会う。師ムーサーとの出会いは、井筒のその後の研究に決定的な影響を与えた。

井筒は師ムーサーとの思い出を、1983年3月、『読売新聞』夕刊のエッセイ「行脚漂泊の師 ムーサー」に記している。ムーサーも学者であるとともにイマームでもあった。わが国に2年間滞在したが、彼のもとで井筒は、アラビア文法学の「シーバワイヒの書」（8世紀の文献）とイスラーム哲学を学んだ。彼は次のように言う。

必要な書物はただの一冊も手もとになかった。そのかわり、何千ページの古いアラビア語の書物が何百冊もそっくりムーサーの記憶のなかに畳みこまれていた。ムーサーとの出会いが私の学問の方向を決定した⁽²⁾。

イスラーム世界にその人ありと知られたムーサーは、書物を一冊も手もとに持っていなかった。聖典クルアーンやハディース（ムハンマド言行録）をはじめ、神学、哲学、法学、詩学、韻律学、文法学など、ほとんど主要なテキストを記憶していたという。

筆者が井筒から直接、師ムーサーのことを聞いたのは、1984年の晩秋、井筒宅を初めて訪問したときだった。井筒夫妻との話の中で、筆者がインドへ留学した折、インド哲学を教えてもらったパンディットのシュリーニヴァーサ・シャーストリーとの出会いについて話したところ、井筒夫妻は頷きながら話を聞いて、ご自分の師ムーサーとの体験も話してくださった。筆者がシャンカラ（約700～750）の哲学を学んだシャーストリー師も、幼い頃からヒンドゥー教の伝統的な教育を受けて、主要な聖典テキストを記憶していた。師の書齋には、一冊の書物もなければ机もなかった。井筒の師ムーサーにとっても、筆者が教わったシャーストリー師にとっても、宗教の違いこそあるものの、聖典テキストは口から語り出される、まさに「語られる聖典」であった。

「語られる聖典」としてのクルアーン

司馬遼太郎との対談の中で、井筒はムーサーについて、次の

ようにも話している。最初の日に「代々木の家に来い」というので、井筒はムーサーの家を訪問した。家の奥の方に向かって、井筒が「サラーム（こんにちは）」と声をかけると、意外に近いところから、「アハラン ワ サハラン（よく来た、よく来た）」というアラビア語が聞こえた。目の前の押入れが開いて、その上段からムーサーが出てきたので驚いたという。井筒は次のように述懐している。

弟子入りしてみたものの習うといっても本もないし、どうするのかと思ったら、「イスラームでやる学問の本なら何でも頭に入っているから、その場でディクテーションで教えてやる」というんです。アラビア語学、アラビア文法学で「シーバワイヒの書」（8世紀の本で、アラビア文法学の聖書と綽名される）、ちょうどインドのパーニニ（パーニニ文典）みたいな古典的なものがあるんですが、それを習いたいといったんです。それは約千ページぐらいのもので、ムーサー先生はその本を端から端まで暗記しているんです。暗記している上に、その注釈本を暗記して、さらに自分の意見がある。それで、アラビア文法学を教わったんです。そのほかにもいろいろなものをその先生に教わりましたが、なにしろ本は使わない。全部頭に入っている。まあ、それはあっちのほうの学問の習慣でもあるんですよ⁽³⁾。

あるとき、井筒はムーサーから「おまえ、旅行するときはどうして勉強するんだ」と尋ねられた。必要な本は持っていくと答えると、ムーサーは「おまえみたいなのは、本箱を背負って歩く、いわば人間のカタツムリだ」と言った。「その学問の基礎テキストを全部頭に入れて、その上で自分の意見を縦横無尽に働かせるようでない」と学者じゃない⁽⁴⁾とも言われたという。

聖典クルアーンはイスラーム教徒にとって「神の書物」として「書かれた聖典」である。それと同時に、「クルアーン」の原義（「読誦されるもの」）が示唆するように「語られる聖典」でもある。井筒は『コーラン』の「解説」（1958年）の中で、「考えてみるともう一昔前になるが、初めて本格的な「カーリウ」（コーラン読み）の朗誦を聴いた時、私はやっとこのイスラームという宗教の秘密がつかめたような気さえたものだ」と記している⁽⁵⁾。彼が師ムーサーから学んだのは、クルアーンなどの聖典テキストのまさに「語られる聖典」であった。井筒の青年時代のエピソードは、イスラームにおける聖典のパロール性の重要性を見事に示していると言えるだろう。

[註]

- (1) 井筒俊彦〔司馬遼太郎との対談〕「二十世紀末の闇と光」『意識の形而上学』（井筒俊彦全集・第10巻）、2015年、605～638頁。
- (2) 井筒俊彦「行脚漂泊の師 ムーサー」『イスラーム文化』（井筒俊彦全集・第7巻）、2014年、227頁。
- (3) 井筒俊彦〔司馬遼太郎との対談〕「二十世紀末の闇と光」、1992年、613頁。
- (4) 同上書、614頁。
- (5) 井筒俊彦訳『コーラン』（「解説」）、井筒俊彦著作集7、中央公論社、852頁。